

●モノグラフ小学生ナウ



異性の友だち

Vol.2-6

© 1992 (株)福武書店 教育研究所/加藤智博・黄川雅子・阿部悦子
東京学芸大学助教授 深谷和子・成蹊小学校教諭 金納善明



目次

特集 男らしさ・女らしさ	2
調査レポート／異性の友だち	
提言と要約	6
1. 異性の友だちとの接触	8
● 異性と遊ばない	8
● 年賀状のやりとり	10
● 手紙と交換日記	12
● 誕生パーティーやプレゼント	14
2. 子どもたちはどうしたいのか	16
● 隣に座るのはイヤ	16
● 男子の言い分・女子の言い分	18
● 友だちになりたい異性とは	20
3. 子どもたちの性役割観	23
● 男子に向く職業・女子に向く職業	23
● 学校での仕事と性役割	25
● まとめに代えて	26
シリーズ／子ども考現学	
子どもの姿・昔と今(4) けいごと	27
資料1・調査票見本	32
資料2・学年・性別集計表	38

特集●

男らしさ・女らしさ

東京学芸大学助教授 深谷和子



1. 今日的な《男らしさ・女らしさ》

最近のしつけの教育では「男らしく」とか「女らしく」という言葉が、ほとんど使われなくなってしまった。戦前の親や教師はこれを頻発したものだが、どちらかと言えば「男らしく」より「女らしく」の方に使用上の問題点があって——、つまり女子が自由にのびやかにふるまおうとするのを規制する時に使っていた傾向があったので、戦後の男女同権の思想の下で、使用されなくなってしまったので

あろう。

考えてみると、「男らしく」「女らしく」という言葉は、内容があいまいである。女子について言えば、昔は足を投げ出して座ったり、人前で自分の意見を言ったり、少し乱暴な言葉を使ったりするだけで、とたんに「女らしくしなさい」という親の声がとんできたものである。しかし最近では、横座りや、足を組んだり投げ出したりしても、別に文句を言われない。自

分の意見をはっきり言う人はむしろ奨励されるし、言葉遣いも男性と女性の差が縮まってきた。現代ではそれらは「女らしくない」のではなく、「ビューティフルでない」程度のものでなくなってしまったのである。

しかし、その差が縮まってきたとは言っても、やはり両性の行動のしかたは、時にあ

る面で違いがあるし、またある意味ではそれが、お互いを惹きつけあう大切な役目をしているかのような場合もある。性差を過大視することなく、とってこれを無視することもなく、今日的な視点でとらえ直してみることも大切であろう。

2. 性差は生まれつきのもの？

「男らしさ・女らしさ」について、心理学者や社会学者が関心を持ち始めたのは、それほど昔ではない。長い間「生まれつきのもの」とみなされていた性差に、行動科学のメスが入られたのは、1930年代に入ってからのことである。まず1935年にアメリカの文化人類学者マーガレット・ミードが『三つの原始社会における性と性格』という著書を出版し、1936年にやはりアメリカの心理学者ターマンとマイルズとが「性度テスト」を作成して発表した。

まずターマンらの研究に触れよう。彼らが作った「性度テスト」はかなり膨大な内容を含むものだが、それをを用いて種々の年齢や職業、身分の人びとの性度を測定したのである。一例を挙げよう。

1) 連想語検査(60問)

たとえば「結婚」という言葉を聞いて、心に思い浮かぶのは、

「子ども(-)、離婚(+)、幸福(-)、許可証(0)」

それぞれの語の後についているのが、性度を測定するための得点になる。マイナス点は女性度、プラス点は男性度を示す。

2) インクのしみ検査(18問)

インクのしみをつけたようなあいまいな図形を見せ、何に見えるかによって、得点化する。

3) 知識(65問)

たとえば、

「トルコ石の色はなに色ですか」

「青(-)、赤(+)、白(+)、黄(+)」

と尋ね、どの領域の知識に精通しているかによって、男らしさ女らしさを測ろうとするもの。

4) 情緒的・道徳的反応(102問)

たとえば、

「あなたのしたことでないことに対して非難された時」

「ひどく怒る(-)、かなり怒る(0)、少し怒る(+)、まったく怒らない(0)」

その結果、女性は仕事上のトラブルよりも人間関係のごたごたで怒り易く、その他でも反応がオーバーであることが見いだされている。

5) 興味(119問)

各種の職業・人物・事柄・人の状態などについて、それが好きか嫌いかを問うもので、たとえば、

「あなたが新聞記者なら、スポーツニュース(+)、音楽(-)、事故(-)のうち、どの記事を書きたいか」などである。

6) 人物評価および意見(42問)

クレオパトラ、レーニン、ナイチンゲールなど著名人の名を挙げ、好き嫌いを問うものや、意見、たとえば「子どもはけんかをしないように教え込まなければならない」についてその正誤を問うものなどである。

著名人について女性は、「女性や不遇な人びと、慈善家」を好み、男性は、「成功した人、スポーツマン」などを好んでいる。

7) 内向性(42問)

たとえば、

「学校はなじみにくいところですか」

「想像上の友だちを持ったことがありますか」

などで、女性の方が内向的な傾向が見い出されている。

このような質問を重ねていって、男性点と女性点を算出する。その結果見いだされたのは、

①男性も女性も、年をとるほど女性的になっていく。

②男性の方が個人差が大きい(極めて男性的な者から逆に女性的なものまでタイプが分かれる)。

③男性も女性も、高学歴ほど男性的になる。

とくに女性の大学卒は、男性度が高くなる。

④知能が高いほど男性度が増す。

⑤職業との関連では、女子に例をとると、
学位所有者、大学や高校の教師
小・中学校の教師、看護婦、司書
秘書、事務員
主婦や音楽家

などの順で女性度が増す。

⑥働いている主婦が仕事をやめると女性度が高くなる。結婚して家庭に入ると、男性的だった女性は男性度が低くなる。

これらのテストの内容には、今日の実感でみるとちょっと疑問な点もある(性度とは、男性や女性の持っている行動の特徴だから、時代によって変化が生ずる)が、それでもかなり示唆的な結果が示されていると言えるだろう。それは「男らしさ・女らしさ」が、決して男性と女性に生まれつき固有のものではなく、年齢や教育、職業など、環境の力で変化していくことがわかった点である。つまり男性と言っても男らしいタイプもいれば、そうでないタイプもいる。いわば衣服と同じように、後天的に身にまとった特性と考えてもよさそうである。とすれば、たとえ足を投げ出して座っている女性がいてもそれを「女らしくない」と非難するのはあたってなくて、むしろ「行儀が悪い」と叱るべきなのだろう。

3. もし同性だけの世の中だったら……

さて、1930年代に出たもう1つの研究、マールレット・ミードの未開社会の人々の性格に関するレポートも、まさにこのことを示唆している。今日多くの国々における「男らし

さ・女らしさ」の内容は、かなり共通なものがあるように見うけられる。しかしミードが生活して調査したニューギニアの未開社会の中には、たとえば、

○アラベシ族

男も女もみな一様にやさしく、子ども好きで「女性的な性格」の持ち主である。

○ムンドグモ族

男女とも戦闘的で、「男性的な性格」の持ち主である。

○チャンブリ族

男女で性格が逆転している部族。男は身体に美しい飾りをつけ、踊ったり、絵を描いたり、彫刻をしたり、芝居の飾りつけをして暮らす。女は、頭をそり、飾り気がなく、漁に出かけたり、かごやマットを作ったりの力仕事をする。

男たちは、ものおじし易く、お互いに警戒心が強く、ささいな侮辱に耐えられず、他人のうわさ話に興味を持っている。

女たちの性格は、男たちの性格よりはるかに勇敢で、決断力に富んでいる。といった報告がある。そしてミードは「私たちが男性的とか女性的とか呼んでいる性質の多くは、社会がそれぞれの時代に、男性と女性にあてがう服装やしぐさ、ヘアースタイルと同じように、性とはほとんど関係のないことを示している」と結んでいる。

ミードの指摘には、少しオーバーな面もありそうだが、しかしこうした指摘は、ターマンらの研究と相まって、それまでの性差観を大きく方向転換させることになった。

こうした研究の結果を見ると、長い間われわれが「男性はかくあるべきもの」「女性はかくあるべきもの」と自ら作り上げてきた、い

わば人工の枠の中に、自分自身を閉じ込めて暮らしてきたことの無意味さを思わずにはいられない。ぶりっ子という言葉が流行しているが、われわれはただ「男性ぶっていた」また「女性ぶっていた」のであって、別に徹底的に男性だったり女性だったりしていたわけではなさそうである。

そうなるかわれわれ男性と女性は、お互いに日常の暮らしの中で、もっと歩み寄り、自分をも相手をも受け入れながら、しかも調和的に暮らしていく努力をしてもよさそうである。われわれの社会は戦後40年近くを経たが、まだ今もって「性別」にこだわりすぎる部分があるようである。

しかしこのことは、われわれの中にある男性性や女性性の部分を無視してしまうということではない。人間が1種類であったら、世の中はずいぶんと退屈なものになっていただろう。2種類の人間がいて、共通点がほとんどだが、ちょっぴり違う部分もあり、それにお互いが惹かれあう。それでこそ人生が味わい深く豊かなものになっていくのかもしれない。

とするとわれわれは、性差を無視するのではなく、とって性差をオーバーに拡大してそのために個人の行動に不自由や無理が出てくるといったこともないように、つまり両性が、適度で、しかも充分魅力的な特徴を備えあう存在になっていくことこそ、望まれる方向なのであろう。とすると、われわれの次の世代、子どもや青少年のしつけや教育にも、この視点をもっと導入すべきなのかもしれない。つまり、お互いに、ほどほどに異性を意識したビューティフルなあり方の研究である。

調査レポート／異性の友だち

東京学芸大学助教授 深谷和子

成蹊小学校教諭 金納善明

提 言

男女共学が実施されて30年を経過したが、今日の小学生たちの姿は、いまひとつ共学の実をあげていないように思う。同じ学級に属し同じ教室に学びながら、仲間は同性の友だちだけで、異性の友だちを仲間とみていないかのような状況が見出される。子どもたちの異性観をもっと健康的なものに育て、もっと両性の調和的な行動がもたらせることを期待したい。

①教師や親が、旧来の性的なステレオタイプにとらわれずに子どもに接する努力をすることが、まず何よりも大切であろう。

②男子と女子の親しい関係を生み出せるように、なるべく多くの接触の機会を用意したい。席、班づくりなどは、できるだけ混合編成にしたい。スポーツや遊びなども、両方の

体力や技術の差に影響されず行えるものを意図的にある割合で用意したい。

③とくに女子には性的なステレオタイプにとらわれず、将来に抱負を持ち、職業準備をし、人生設計ができるよう援助したい。また日常の係活動などにおいても、積極的な役割をとらせるようにしたい。

④「女のクセに」「男のクセに」という言い方ではなく、「女の子はもっとこうした方がステキだ。カッコイイ」「男の子は……」という表現で、両性の健康的なセックスアピールを育てるための援助も必要ではないだろうか。日本の風土にはこうした視点でのしつけの方法がなかっただけに、これが今後の課題となろう。

要 約

① 同性とばかり遊んでいる

男子の85%、女子の72%は、学校でよく遊ぶ「異性の友だち」をまったく持っていない。(表1)



② 61%

バレンタインデーにチョコレートもらったことのある男子は61%。(図8)



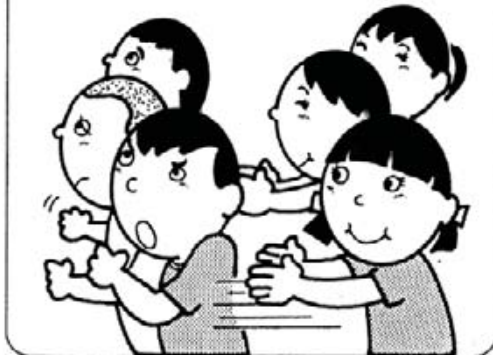
3 隣に異性が来るのはイヤ

男子の90%、女子の75%は、同性の隣に並びたいと希望している。
(図9)



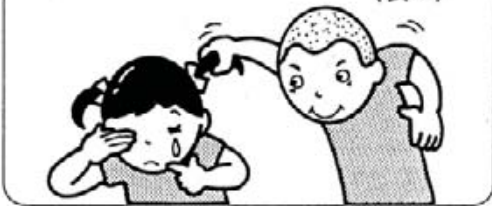
4 女子の方が男子と接触したがる

男子の65%は学級が男子だけであることを望み、女子の68%は共学を望んでいる。(図10)



5 「暴力をふるわないで」が1位

男子、女子ともに異性に対して言いたいことの1位は「暴力をふるわないでほしい」で、2位以下は、男子は女子に「女らしく」を望み、女子は男子に「やさしくて、当番をまじめに、いっしょに遊んで、男らしくあってほしい」などと望んでいる。
(表4)



6 ステレオタイプな考え方

子どもたちは、学校生活の中でのわずかな役割の中にも、ステレオタイプな性役割観を反映させた見方をしている。「審判、司会、代表」などは男子向き、「書記、給食のもりつけ、掃除」などは女子向きと考えている。(表8)



サンプル数 (人)

学年\性	男子	女子	計
4年	303	229	532
5年	342	310	652
6年	258	263	521
計	903	802	1,705

調査概要

対象●東京都・千葉県の小4・5・6年生 計1,705名
時期●昭和57年2月
方法●学校通しによる質問紙調査

1. 異性の友だちとの接触



第二次世界大戦が終わって、すでに40年近くの歳月が流れた。この間のわれわれの生活は、信じられないほどの変化を遂げたが、ただ一つ、腑に落ちない思いがするのは、男子と女子の接触のしかたである。外遊びをする子どもの姿を目にすることも少なくなってしまった昨今だが、たまに公園や道路で遊ぶ子どもたちに出会っても、たいていは男子は男子どうし、女子は女子どうしで遊んでいる。登下校の姿も、むろんそうである。

戦後の東京で小学生時代の半分を過ごした

筆者にとっては、当時の方が現在よりはるかに男子と女子がいっしょになって遊んでいたような記憶がある。男女共学はむろん戦後になってのシステムだが、30数年を経て、このシステムは一体うまく生かされているのであろうか。

こうした問題意識から本レポートは、小学生たちにとって「異性の友だち」は自分の友だちの中でどう位置づけられているのか、いわば対異性行動の実態と意識に接近してみようとするものである。

異性とは遊ばない

1学級には、ほぼ20人ずつの男子と女子が いる。しかも教室の仲間とは1日7時間近く

表1・よく遊ぶ異性の友人の数

(%)

	人数		い ない	1人か2人	3人か4人	5人以上
	性別					
学 校 で	男 子		85.0	4.7	4.1	6.2
	女 子		72.2	9.5	6.5	11.8
学 校 か ら 帰 っ て	男 子		88.5	7.2	3.1	1.2
	女 子		80.2	10.5	6.6	2.7

表2・よく遊ぶ同性の友人の数

(%)

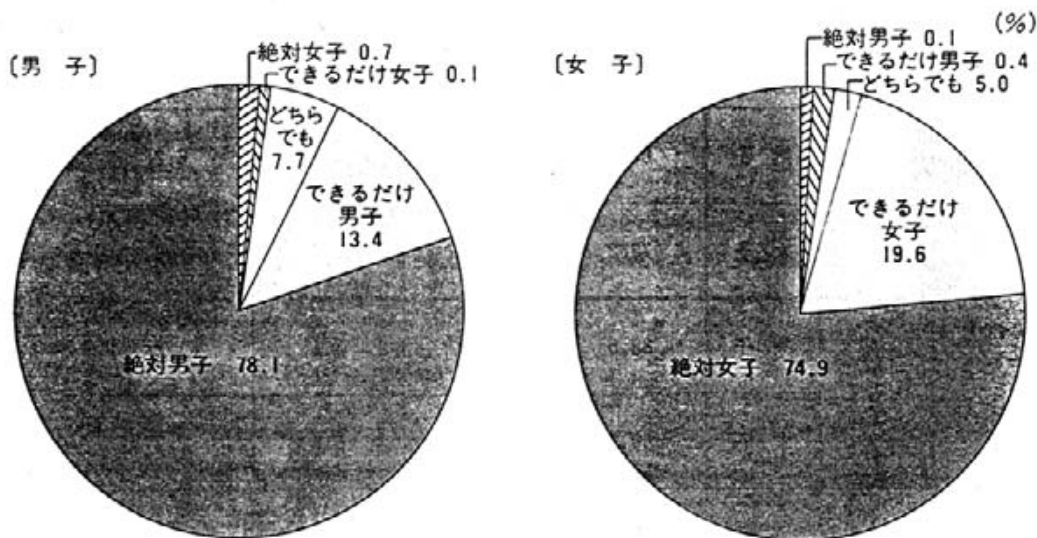
	人数		い ない	1人か2人	3人か4人	5人以上
	性別					
学 校 で	男 子		1.3	2.4	17.3	79.0
	女 子		1.5	6.3	20.0	72.2
学 校 か ら 帰 っ て	男 子		11.2	23.9	34.6	30.3
	女 子		14.2	31.3	34.4	20.1

も同じ屋根の下で暮らすのである。たとえ学級が新しくなり、はじめのうちにこそ多少のこだわりがあったにせよ、ふつうなら数日で仲間としての自然の接触行動が生まれ、異性の友人との間でも友人関係が生まれるはずである。

この点を見ようとしたのが表1、表2である。「あなたが学校でよく遊ぶ友だちは」とい

う質問で、同性と異性を分けて集計した結果である。表1が示すように、男子の85%、女子の72%は「異性の友だちで、よく遊ぶ子どもはいない」と答えている。表2には同性の場合を掲げたが、「友だちがいない」と答えているのはわずか1%強にすぎない。このことは、子どもたちが学校では、ほとんど同性の友だちとしか遊んでいないことを示している。つまり

図1・学校に持っていく物や宿題がわからない時、男女どちらに電話をかけるか



クラス・サイズが40人と言っても、子どもにとっては1学級が20人でしかないことになりそうである。異性の友だちもこだわりなく遊んでいるのは、たかだか10%前後ということになる。

放課後はどうか。表2の下部に掲げたように、もともと同性の友人とも接触が減るのだから、異性の友だちとの接触が一層少なくなるのは当然である。「異性と遊んでいない」子どもの割合は一層増えている。

しかし、もし直接話したり遊んだりすることに抵抗があるとすれば、帰宅後電話でのやりとりはどうか。「宿題などでわからないことがあって電話をする時」との仮定で、電話の相手を尋ねたのが、図1である。

図が示すように、「絶対に同性にかけろ」が男子78%、女子75%、「できるだけ」も含めると男子92%、女子95%が同性にかけると答えている。つまり異性の友だちとの接触は、電話では一層稀なことになる。

年賀状のやりとり

ふだんは手紙はおろか、口をきくこともほとんどない相手。好意だけは十二分に持っているが表現のすべのないままにいた相手に1年に1度、年賀状を出す。その返事がくるかどうかで、相手の気持ちをそっと汲みとろうとする。そうした経験は、たいていのおと

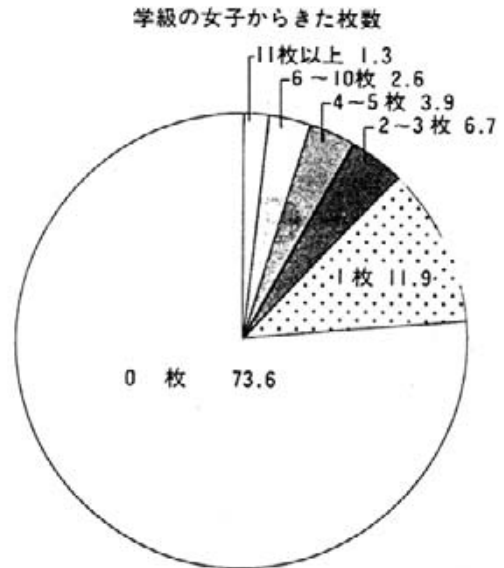
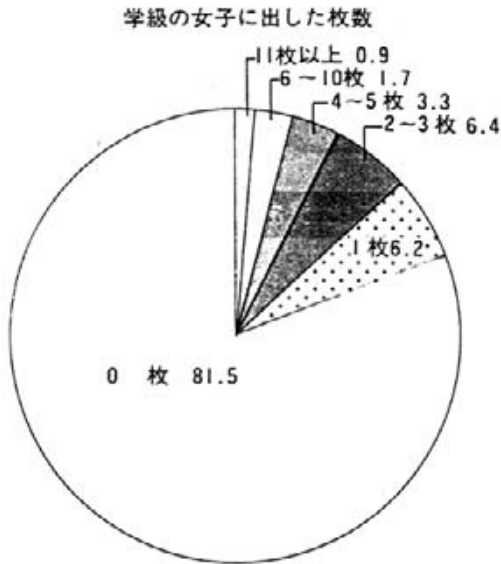
なたちの中にあるのではなかろうか。異性と接触らしい接触をしていない子どもたちだが、では年賀状や手紙はどうか。

図2に、異性との年賀状のやりとりを掲げた。男子で1枚も女子に年賀状を出さなかった子どもは82%。逆に1枚も女子からこなか

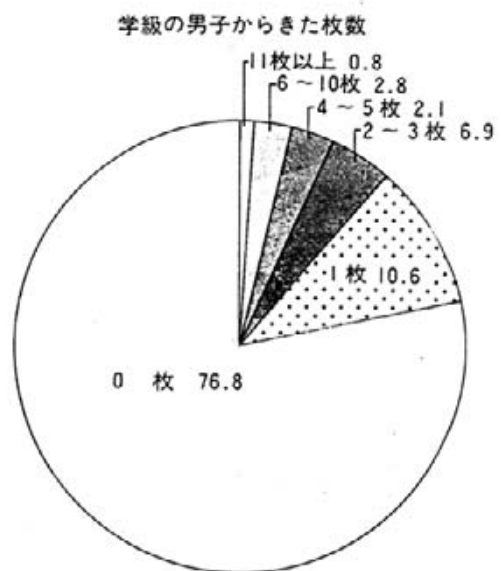
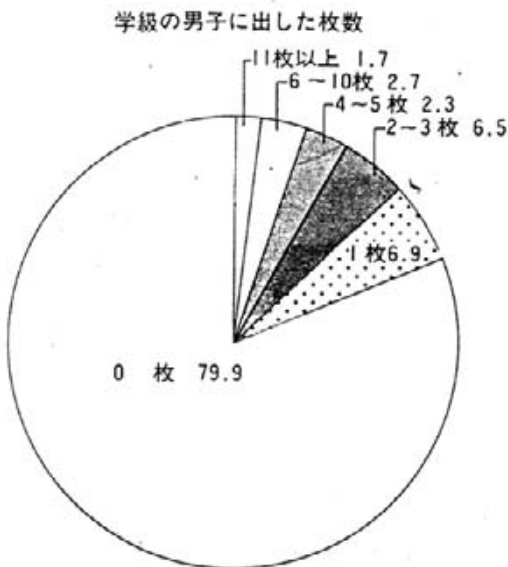
図2・年賀状の枚数(異性とのやりとり)

(男子)

(%)



(女子)



った子どもが74%。女子は、出さなかったのが80%、こなかったのが77%。ここでも同じような割合の数字がある。巻末の集計表によると、男子の72%は6枚以上の年賀状を同性

の仲間に出し、女子も83%がそうしている。それと比較すると、異性の友だちとまったくやりとりをしない子ども8割の数字は、ここでもまた、あまりに不自然である。

手紙と交換日記

さて、もう少し秘密っぽい部分に入ってみることにしよう。まず手紙である。毎日顔を合せている友だちはむろんのこと、学級や学

校の違ってしまった子どもにでも、「手紙」を書くというのは、特別の気持ちが必要でできないことであろう。

図3・何となく同性に手紙を出すことがあるか

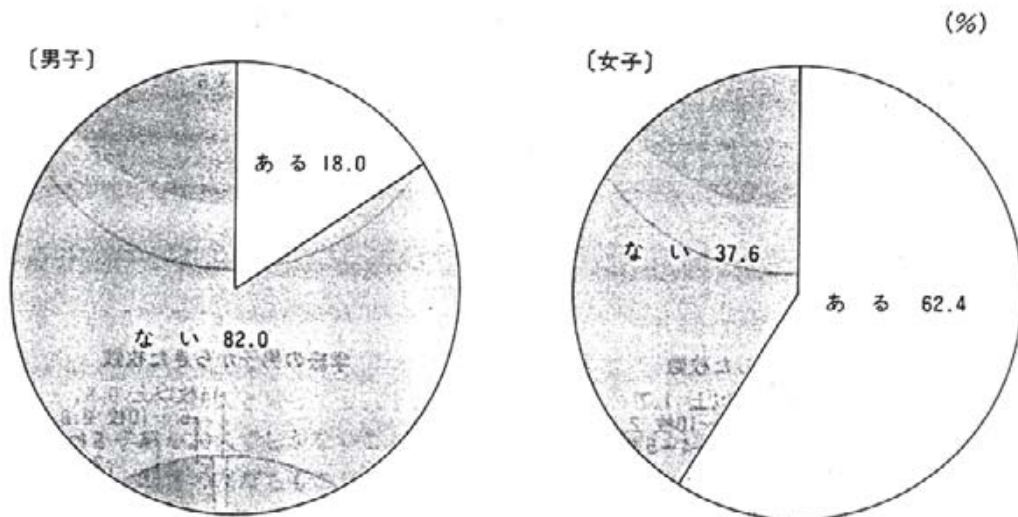


図4・何となく異性に手紙を出すことがあるか

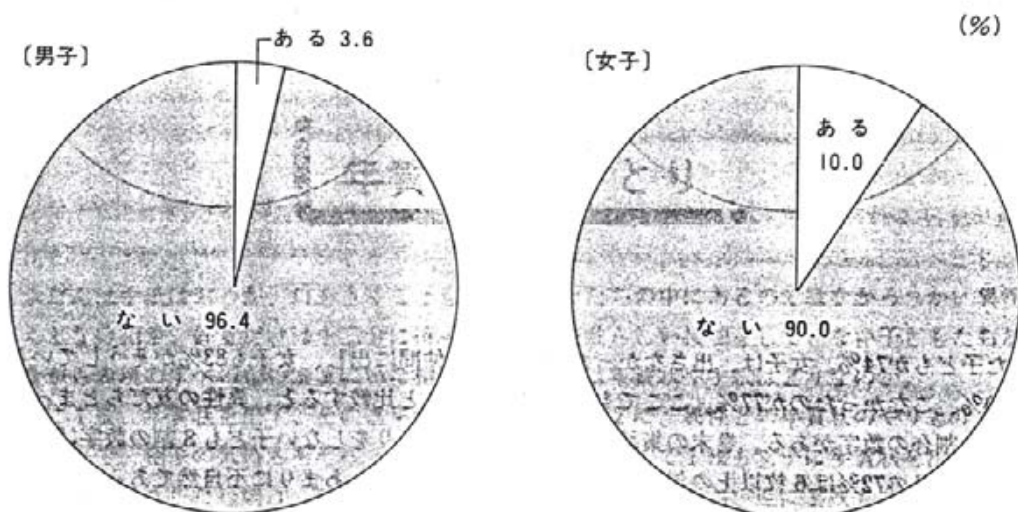


図3は、まず同性に限って手紙のやりとりの経験を尋ねたものである。男子の18%、女子の62%は、「とくに用事がなくてもおしゃべりをしたくて仲間に手紙を出すことがある」と

言っている。とくに女子は手紙好きのようである。では異性とはどうか。図4を見ると例によって数字は男子で4%、女子で10%に低下してしまう。しかし割合は少ないが、ここ

図5・同性との交換日記の経験

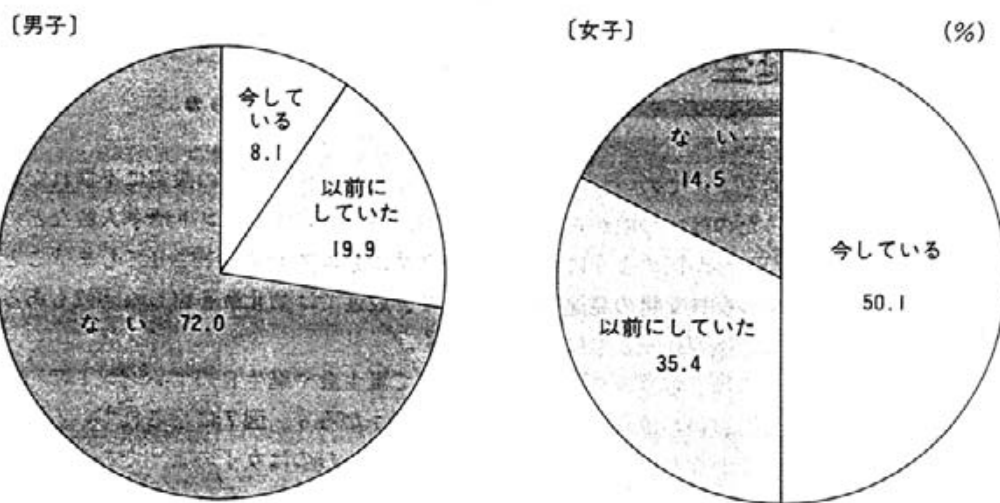
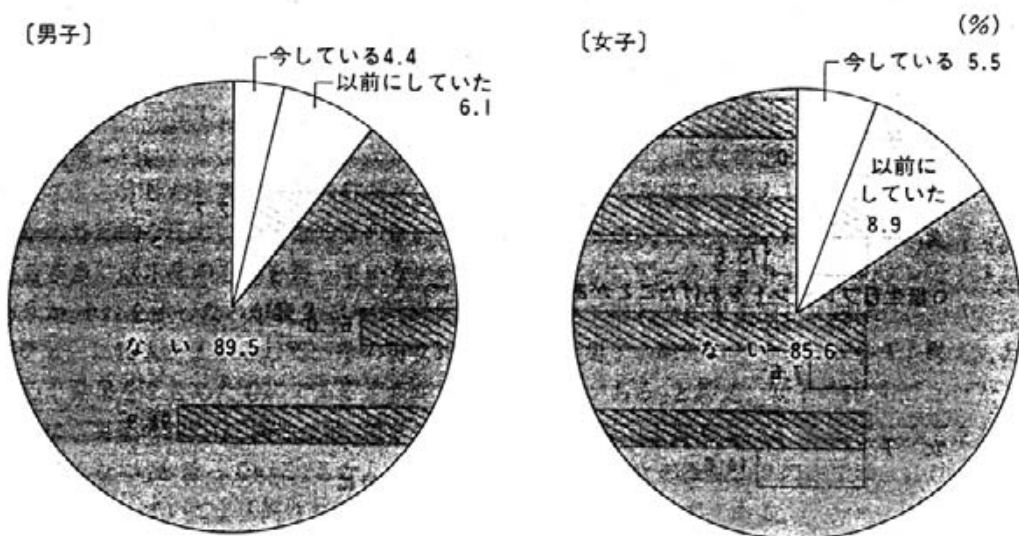


図6・異性との交換日記の経験



で表れてきた4%と10%の子どもはおそらく昔で言う「ラブレターめいたもの」の経験者ということになるだろう。意外に少ないと言うべきか、多いと言うべきか。

さて、もう一つ図を見てみよう。前ページ図5・図6は、交換日記の経験を見たものである。20年ほど前から始まったと言われる交換日記は、現在ではすっかり定着して、仲間づくりの一つのパターンとしてゆるぎない役割を果たしているとも言われる。図5に示したように女子

について見ると、現在している子ども50%、経験のある子ども35%を含めると、85%の子どもが、この秘密めいた遊びに参加している。

しかし図6に示したように、異性の友だちを相手の交換日記は、非常に少ない。女子を例にとれば、現在男子としている子ども6%、以前の経験者9%を合わせても15%ほどしかない。前に見た手紙の交換とも大差のない結果である。

誕生パーティーやプレゼント

子どもたちの間で仲間をよんでのいわゆる誕生パーティーが始まったのはいつ頃からののだろうか。とにかくわが国のように、おとなの間でもフォーマルな社交場の発達していない風土の中で、この風習は子どもに社交のマナーを教える唯一の場とも言っていいし、また子どもにとっても、いわば友情を確認しあう機会のように、なかなかの人気であ

る。しかしこうした場の設定に不慣れな親たちが、つついプレゼントや、人数などのプログラムをエスカレートさせてしまうことになり、最近では禁止令を出した学校もあると聞く。

さて誕生会や誕生日のプレゼントのやりとりはどうだろう。図7に示されているように、これらを好むのは女子のようである。しかし、

図7・誕生パーティー・プレゼント

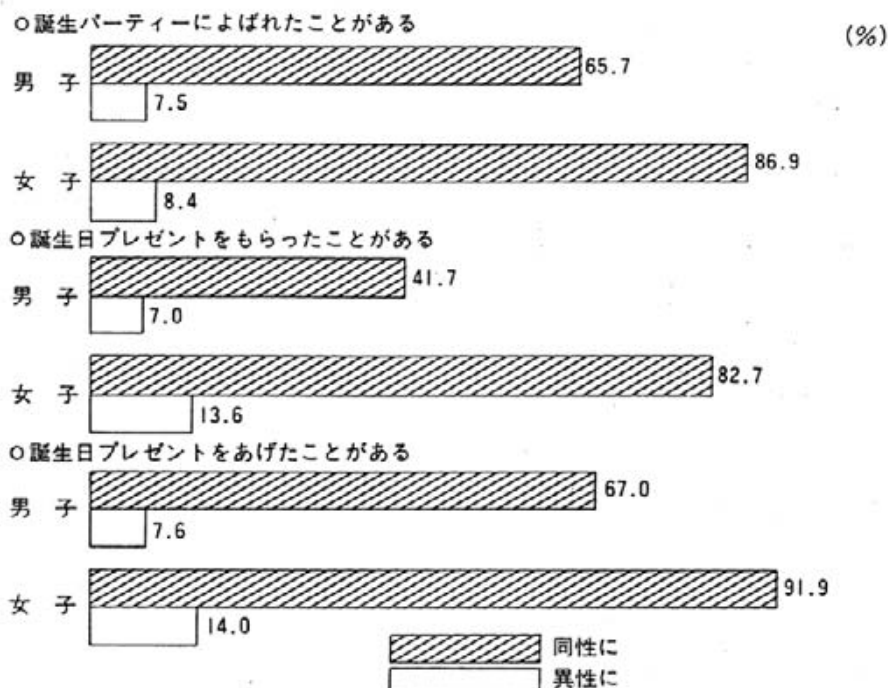
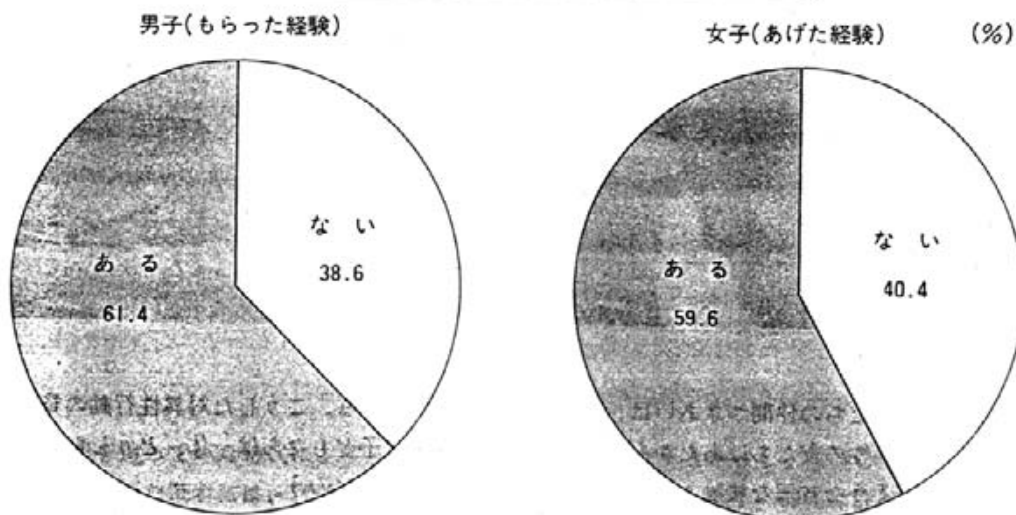


表3・誕生パーティーによびたい人

	男子		女子	
	男子	女子	男子	女子
同性のみ	72.0	51.8		
同性を多く、異性を少なく	15.1	30.7		
同じくらい	8.3	16.2		
異性を多く	1.3	0.3		
異性ばかり	2.3	0.5		
その他	1.0	0.5		

図8・バレンタインデーのチョコレート



男子も思ったより経験を持っていることがわかる。しかしその相手となると、ここでもやはり圧倒的に同性で、異性とのやりとりは、無きに等しい。

さて、こうした対異性行動の貧弱さは、何らかの外部的な圧力によるものなのか。それとも本当に欲求そのものを持っていないのだろうか。それを示したのが表3である。誕生パーティーに10人をよぶとして、その男女比を尋ねた結果をまとめたものである。表が示すように、男子の72%は「同性だけ」で、「異性をよびたくない」と言っている。しかし女子はやや様子が違って、「同性だけ」と言って

いるのは52%でしかない。「同性を多く、異性も何人か」が31%、同じ比率が16%。つまり、とくに女子には異性との接触を求める気持ちがあるが、それが何らかの原因ではばまれているとみてよいかもしれない。

最後にもう一つ、最近流行しているバレンタインデーのチョコレートのプレゼントについて尋ねた結果を図8に掲げた。

男子の61%は「チョコレートもらったことがある」と答え、女子の60%は「あげたことがある」と答えている。今までにみてきた貧弱な異性との接触ぶりの中では、これだけが逆に意外な数字である。

2. 子どもたちはどうしたいのか



今日の子どもの仲づきあいは、同性とばかりで、異性の友だちはあたかも友だちではないかのような貧弱な接触ぶりを見てき

たわけである。こうした対異性行動の貧しさの中で、子どもたちは一体、どうしたいと思っているのだろうか。

隣に座るのはイヤ

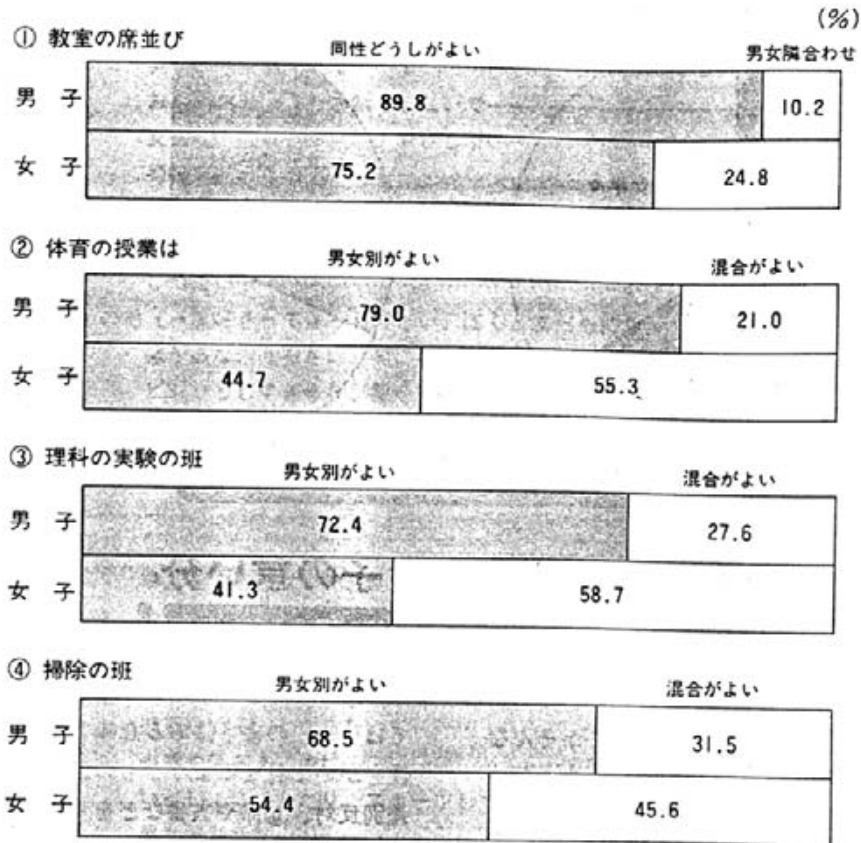
小学校の教室は(私立でない限り)、日本中どこに行っても、20人ずつの男子と女子がいる。狭い教室の中では、男子と女子が当然ごく近くに座り、同じ班に属し、同じ授業を受けることになる。そしてまた、これはごく自然なことであろう。

しかし前章で見てきたように、不自然なほどに両者の接触の貧しさがあるとすれば、当然同じ教室にいても子どもたちは、いっしょ

の場で作業をすることをそれほど喜んではいないだろう。そのあたりを尋ねた結果を図9に示した。

まず図9の①に見い出されるように、席並びについては、同性どうしを希望する子どもが、男子90%、女子75%と圧倒的な数字である。どうしてこんなに異性を敬遠するのか。戦後の華やかな共学時代——つまり、国中が「男女平等」に神経質になっていて、または一

図9・同性どうしがよいか、男女別がよいか



つの理想を追っていた時代に、ずっと男子と席を並べていた筆者には、理解に苦しむ数字である。

次は野外の授業として体育の時間をとってみた。男女別に授業するのを希望しているのは、男子79%、女子45%。これも大きな数字である。とくに、ここに表れた男子と女子の差は、よく見ると今回のデータのすべてに一貫して流れている傾向である。つまり異性を敬遠する気持ちと「いっしょにやっていきたい」とする声とが、けっこう相半ばする傾向である。

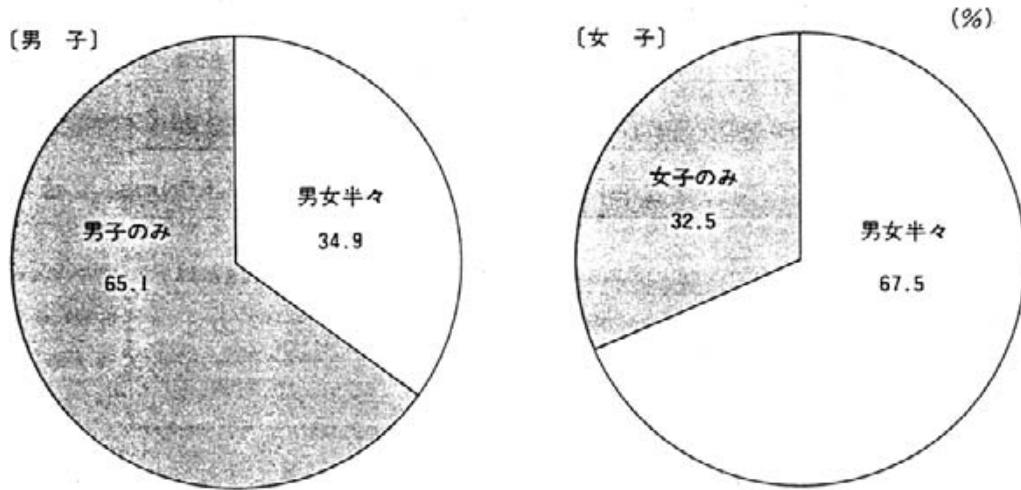
次は理科の授業での実験の班。男女別の班を希望する子どもは、男子72%、女子41%。最後に掃除。掃除をサボることについて女子から非難される男子なので、この時だけはま

じめな女子といっしょを望むかと思ったのだが、ここでも男子の69%は別々を望んでいる。女子は54%。

さてそれならばいっそのこと男子組、女子組のように、子どもたちは学級をまったく別に分けてしまえばいいと思っているのかも知れない。それをみたのが図10である。

この結果は男子と女子ではまったく逆で、男子の65%は別学を望み、女子の68%は共学を望んでいる。しかしおもしろいのは、図9に示された結果よりは微妙に「共学」を支持する割合が増えていることで、あれほど男子だけを主張していた男子ですら、男女半々の学級を望む子どもは35%に達している。女子はむしろ68%という大きな割合である。

図10・学級は同性のみがよいか、男女半々がよいか



男子の言い分・女子の言い分

異性はいやだ、別々に行動したい、と騒いでいる子どもたち。一体相手のどこがそんなに気に入らないのか。子どもたちの声を聞いてみようではないか。

表4は「女子に言いたいこと(男子に言いたいこと)があったら書いてください」としたオープンアンサーの部分を集計したものである。この欄は、意外に無記入が多かった。いやだいやだと言っている、さて改めて文句をつけるとなると、すぐには思い浮かばない程度のたわいのない反発なのかもしれない。

それぞれの言い分をまとめた結果を見比べるとおもしろいことが見られる。女子の方が男子に対する言い分が多いこと(女子の反応数は男子の2倍強)、両者とも挙げられている内容はかなり共通のものが多いこと、等である。

まず、男子の言いたいことをまとめてみると①暴力をふるわないで、②男言葉を使わないで、いばらないで、女らしく、の2つの内容に代表されるし、女子の方でも①暴力をふるわないで、いじわるをしないで、②男らしく、と男子と共通なリクエストがあり、その

他に③いっしょに遊んでほしい、やさしくしてほしい、のようにある意味では女子の依存性をかいま見せるようなもの、また、④男女差別反対、⑤係や当番などをサボらず、もっとまじめに、なども見い出される。

とくにおもしろいのは、男子のリクエストに「弱い性」を思わせるかのような、「暴力をふるわないで、先生に言いつけないで、男言葉を使わないで」のような、哀願調のものが多くことであろう。小学校5、6年は一生のうちで一番女子の発達が目ざましく、1つの学級に姉と弟がいるようなもの、とも言われるが、ちょっと気になる弱虫ぶりというところだろうか。

これと関連した数字を図11に掲げた。先生の叱り方に、性別による差があるかどうか尋ねた結果である。男子の71%は、「先生は女子にやさしく、自分たちに厳しい」と言っていて、「同じぐらい」はわずか27%。しかし女子は「同じぐらい」が48%。「自分たちの方にやさしい」46%。わずかながら「男子にやさしい」と思っている子どもも6%いる。それぞれの立場で、同じ担任の行動も、ずいぶん

表4-A・男子から女子へ言いたいこと

(人)

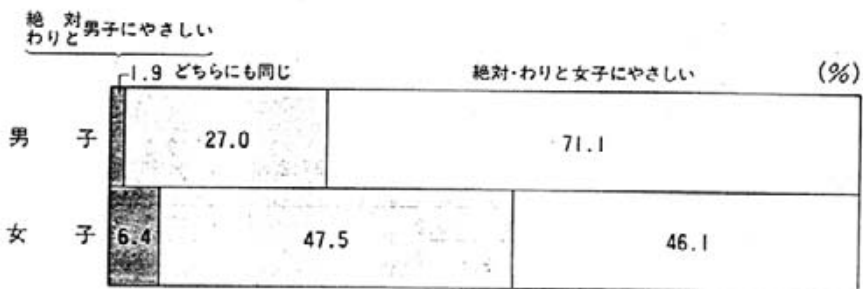
暴力をふるわないで……………	19
先生に言いつけしないで……………	11
男言葉を使わないで……………	7
おしゃべり、うわさ話をしないで……………	7
女らしく、しとやかに、やさしく……………	8
嫌味を言わないで……………	6
いばらないで、生意気だ……………	4
口答えしないで、男にさからわないで……………	4
しつこい……………	3
その他（一度好きって言ってほしい、ほくと友だちになって、やせてほしい、強がるな、うるさい、男にならないで、「先生・先生」と言うな、あまりビシッとしすぎるな、髪を短くして、バカ、アホ、死ね等）	

表4-B・女子から男子へ言いたいこと

(人)

暴力をふるわないで、乱暴しないで……………	42
いじわる、いやがらせをしないで……………	27
やさしくしてほしい……………	22
女子の悪口を言わないで……………	14
怒らないで、どならないで……………	9
当番や係をまじめに……………	9
いっしょに遊んだり、スポーツしたり仲よくしたい……………	8
男女差別反対……………	6
男らしくあってほしい……………	6
女子の意見も聞いてほしい……………	3
女のくせにと言わないで……………	2
その他（男子は個性がなくておもしろくない、体形や顔のことを言わないで、バレンタインチョコをもらっても人に言わないで、勇気をもって、たのまれた仕事をやって、自信過剰、呼びすてにしない、遊び場をとらないで、放課後遊びにつれて行って、たまにはけんか相手になって、授業中うるさい、給食のもりつけを公平に、バカにしないで、カッコをつけないで等）	

図11・先生の叱り方



と違って見えるものである。しかし見方の差はあるにせよ、どうやら担任が、男子と女子で扱いを意識してか無意識にか、微妙に違え

ていることは、確かのようにである。その細部はわからないものの、考えさせられる数字である。

友だちになりたい異性とは

さてお互いの不満を聞いてみたところで、もう少し具体的に、子どもたちがどんな異性を好ましいと思っているのかに接近してみることにしよう。表5・表6に「どんな異性と友だちになりたいのか」をまとめておいた。

ここでも2つの表に特徴的なのは、好まれ

る男子と女子の像が非常に似かよっている点である。順位は少し入れ替わるが、男子は①親切で、②正直で、③しっかりしていて、④おもしろい女の子を好ましいと言い、女子は同様に①勇気があり、②親切で、③おもしろい、④正直な男の子がいいと言っている。つ

表5・どんな異性と友だちになりたいか(男子)

(%)

項目	尺度	とても・わりと 友だちになりたい	どちらとも いえない	あまり・絶 対 友だちになりたくない
誰にでも親切		15.3 24.1 39.4	27.9	7.3 25.4 32.7
正直		14.0 22.8 36.8	29.6	7.8 25.8 33.6
しっかりしている		10.4 22.4 32.8	31.9	7.7 27.6 35.3
ユーモアがある		9.5 22.0 31.5	34.2	8.8 25.5 34.3
動・植物をかわいがる		10.4 18.1 28.5	37.1	8.4 26.0 34.4
頼まれればひきうける		9.4 19.1 28.5	37.1	9.0 25.4 34.4
ルックスがよい		8.8 15.7 24.5	37.1	8.4 30.0 38.4
スポーツが得意		9.0 15.3 24.3	36.3	10.1 29.3 39.4
勇気がある		7.4 14.4 21.8	39.2	9.7 29.3 39.0
勉強ができる		5.2 12.2 17.4	37.2	13.3 32.1 45.4
芸能界に詳しい		3.9 5.2 9.1	40.1	17.0 33.8 50.8

まり「男子は強く、女子はやさしい」のは昔の両性イメージであって、現代では、性別にかかわらず「強さ」と「やさしさ」の両方を具有することが必要になってきたのであろう。

これを別の形で表したのが図12である。「とても・わりと友だちになりたい」パーセントをグラフ上に示したのだが、おもしろいのは、すべての項目で女子の数値が大きいことである。すなわち女子はどんな特性を持っている男子にも、わりと「友だちになりたい」と言っているのに対して、男子は全体として気乗り薄といった感じである。女子が迫って、男子は逃げる、とても言えようか。

しかしグラフは、2本ともほぼ平行して描

かれている。性差が見られるのは「勇気のある」ぐらいで(つまり勇気のある男子は好ましいが、勇気のある女子はあまり好ましい評価はされない)、他はよく似たプロフィールを示す。お互いに求められる人物像に差がなくなった傾向がこの図でもよく表れている。

最後にもう一つ。求める異性像の上位に、「誰にも親切な」の項目が上がってきているが、これがもしかしたら両性の反発を生み出している一因なのかもしれないという気がする。つまり現代の若者たちの持つ「やさしさ」志向、自分に対するやさしさや手厚い保護を期待する態度、他人に対する甘えが、かくも上位に「親切な子」を位置づける結果となっているの

表6・どんな異性と友だちになりたいか(女子)

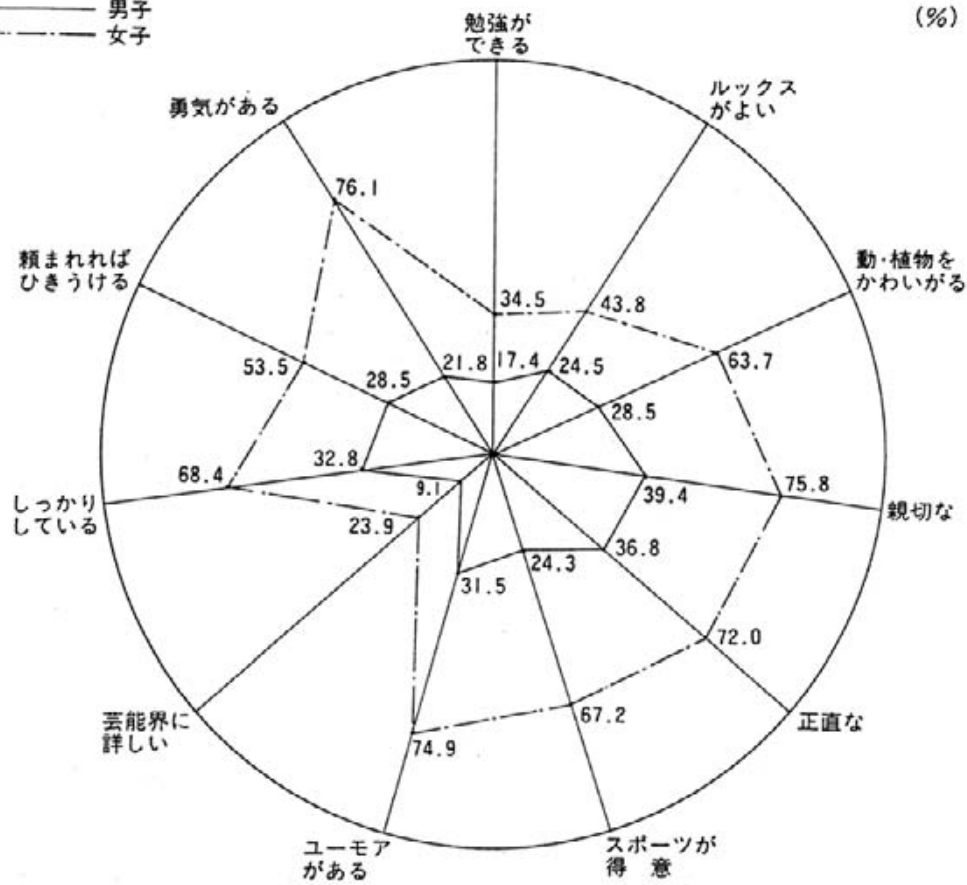
(%)

項目	尺度	とても・わりと友だちになりたい	どちらともいえない	あまり・絶対友だちになりたくない
勇気がある		42.2 33.8 76.0	18.1	3.5 2.4 5.9
誰にでも親切		40.2 35.6 75.8	17.3	3.8 3.1 6.9
ユーモアがある		39.1 36.1 75.2	19.1	3.3 2.4 5.7
正直		37.6 34.7 72.3	20.2	4.7 2.8 7.5
しっかりしている		32.9 35.4 68.3	23.7	5.7 2.3 8.0
スポーツが得意		33.3 33.9 67.2	24.9	5.0 2.9 7.9
動・植物をかわいがる		26.0 37.7 63.7	27.1	5.2 4.0 9.2
頼まれればひきうける		20.8 32.7 53.5	35.9	7.1 3.5 10.6
ルックスがよい		14.4 29.4 43.8	40.7	10.9 4.6 15.5
勉強ができる		6.8 25.7 32.5	45.7	15.7 6.1 21.8
芸能界に詳しい		6.8 17.1 23.9	53.3	16.7 6.1 22.8

図12・友だちになりたい異性とは

とても友達になりたい
わりと友達になりたい

—— 男子
- - - 女子



かもしれない。もしこれが甘えとすれば、現実的にそれが満たされないことで、逆に相手

への反発や拒否となることも、充分考えられるからである。